しごと INTERVIEW インタビュー

人間が好きだからこそ、子どもの変化を見守ることができる

三戸部さんは教職に就いて30年あまりのベテランの小学校教師です。このインタビューではこれまでの経験に裏打ちされた授業への取り組み、子どもたちへの対応を語っています。そこからは教師という職業への熱い思いが伝わってきます。

● 小学校教諭　三戸部えみ子さん

みとべ・えみこ●福島県生まれ。教員養成大学卒業後、宮城県で公立小学校教諭となって30年あまり。現在、仙台市立南光台東小学校に勤務。授業の活性化を図るために工夫をこらし、子どもたち同士の学び合いを大切にする。

女性でも仕事を続け、経済的に自立した人生を歩みたい

――教師という職業を選ばれた理由を教えてください。

三戸部　高校生の時から、女性でも一生続けることができる仕事に就き、経済的に自立して生きていこうと考えていました。当時は生涯働くことを前提に女性を採用する民間企業はとても少なく、また特別な才能が私にあるわけではありません。

そうした中で、私がそれまで通ってきた学校には多くの女性教師がいました。女性が生涯続けることができる仕事として教師という職業が身近な存在だったと言えるでしょう。それで、自分も教師になろうと考えるようになりました。

――それで教員養成大学に入学し、教育実習も経験されたのですね。学生時代に学んだことで、教師としての仕事に役立っていることはありますか。

三戸部　自分でやりたいことを見つけて学ぶという点で、大学での勉強はとても面白かったですね。「本来、勉強は楽しいんだ」という経験は教師という仕事をするときのバックボーンになっていると思います。直接に何かに役立つということではありませんが、教師という仕事を続けるための土台のようなものになっています。

教育実習は、3年生の時には大学の付属中学校、4年生の時には公立の小学校と2回経験しました。付属中学校で教育実習をしたときは授業に臨むにあたってどれだけの準備が必要か…教材研究の重要性を学びました。一方公立小学校には様々な家庭環境の子どもたちがいます。そのため生活のサポートを含め、丸ごと子どもたちを受け止めて教育することの大切さを学びました。

教員養成大学を卒業したからといって、全員が教員になるとは限りません。大学には一般企業に就職する人も少なからずいました。私の場合、教育実習を経験することで教師は自分に合っている仕事ではないかとあらためて確認できました。教育実習での経験は、教師という職業を選択するための最後の後押しをしてくれたと言えるかもしれません。

――実際に教師の仕事に就いて、それまで考えていたこととのギャップはありましたか。

三戸部　学生時代は教材研究を含め、授業や生活指導など子どもに直接関わることが教師という仕事の大半を占めるだろうと思っていました。しかし実際に教職に就いてみると、実に様々な仕事をしなければならないことに驚きました。膨大といっても過言ではない書類の作成、集金、トイレの掃除、草むしり、校舎の簡単な修繕も教師の仕事です。ほかにも行事の準備など様々な仕事があります。これらは本来の教師の仕事ではないと思われるかもしれません。しかし、学校をきちんと運営し、教育環境を整えるために欠くことができない仕事なのです。汚い校舎よりも、きれいな校舎のほうが教育効果は上がりますから。

子どもたちが刺激しあうことで授業が活性化し、学級全体の学力が向上する。

●「しごとインタビュー」のバックナンバーがウェブサイトで読めます。
（(社)雇用問題研究会ホームページ）http://www.koyoerc.or.jp/sigoto.html

授業を活性化するため、子どもたちの興味を引き出す工夫

――教師の仕事の面白さややりがいはどのようなところにありますか。

三戸部　やはり授業は面白いですね。どのように教えたら子どもたちの興味を引き、理解してくれるのかをいつも考えています。例えば私が手書きで作った動物や魚のイラストを教材として使うと、本当に子どもたちは興味を示して授業が盛り上がります。

そうした工夫を考える際、前提となるのは自分が受け持つクラスの子どもたちの実態を的確に把握していることです。学力も一定ではないし、性格も違う。障害を持つ子どももいます。そうした違いがある一人ひとりの子どもたちがお互いに刺激し合い、それぞれの個性がうまくかみ合うように工夫するのです。教師は子どもたちの表情を読み取りながら、この子に指名してみようとか、もっと噛み砕いて説明しようとか、生徒とキャッチボールをしながら授業を進めます。

授業は「子どもたちとの共同作業」という。

子どもたちは授業に乗ってくると、様々に発言をします。ある子どもが発言し、別な子どもが違う角度から発言する。すると子どもたちは生き生きとして授業に集中し、クラス全体の学力も伸びてきます。一人だけではそれほどの効果は期待できません。学級全体としての学びが大切だと考えています。そういう意味では授業とは教師と子どもたちとの共同作業と言えるかもしれません。「授業が成り立つ」とはそういうことだと思うのです。そして子どもたちから「先生、わかった！」と言ってもらえたときはとても嬉しくなります。

――厳しさを感じるのはどんなところでしょうか。

三戸部　かつてと比べると、社会全体が子どもを育てる力が劣化しているように思えてなりません。また親自身がとても苦しい状態にあることも多く、複雑な家庭環境の子どもが増えてきたというのが実感です。特に公立の小中学校ではそうした環境に置かれた子どもたちを教師たちが必死に支えているというのが実情ではないでしょうか。そうした中で、親との面談を行いますが、プライバシーにまで踏み込むことは避けなければなりません。それでも子どもをよりよく育てるという一点で、話し合いを進めています。

――仕事を進める上で、普段からどんなことを心がけていますか。

三戸部　まず健康ですね。自分自身が健康に問題があると、子どもに対してきつく接してしまい、彼らを追い詰めかねません。穏やかに接すれば、子どもたちにも良い影響を与えます。また、子どもたちが何か問題を起こしたときもゆとりを持って対応することができ、解決に導くことができます。

――キャリア教育についてのご意見をお聞かせください。

三戸部　教育の最終目的は、子どもたちが成長し社会に出たとき、自立して生きていく力を身につけさせることです。そのために小学校では、まずその基礎固めをします。例えば約束を守る、与えられた役割をきちんと果たす、あるいは協力することの大切さなどを教えます。それが将来、職業生活を送る上でも基本となると考えるからです。

また、様々な仕事に携わっている方々を学校にお招きし、お話を直接に聞くという取り組みも行っています。その際には、教師は相当な下準備をします。そうした方々と直接会い、目を見てお話を聞くというのは、文字だけでは学ぶことができない臨場感があり、子どもたちも得るものが大きいと思います。

――教師を目指す人たちへメッセージをお願いします。

三戸部　教師は「人間が好き」という思いがないと務まらない職業かもしれません。あるとき望ましくない行動をとった子どもも、時間が経つと変わってきます。その変化を待つことができる、期待し続けることができることが教師には必要だと思うのです。長い目で子どもを見守る…その根底には「人間が好き」という強い思いがあります。

いわゆるエリートではなく、どこかに人間的な弱さを持っている人のほうが教師に向いているのではないでしょうか。自分に弱さがあると、他者の痛みやつらさがわかるからです。それは子どもと接する上でとても大切なことです。